

国史跡末松廃寺跡発掘調査現地見学会資料

令和2年11月1日(日)

1 調査の概要

- 調査期間：6月下旬から11月上旬(予定)
- 原因：国史跡末松廃寺跡の再整備事業
- 目的：金堂北東隅の調査

令和2年度は金堂の発掘調査を実施しています。金堂は仏像を安置する古代寺院の中心的な建物で、昭和41年から42年に実施された第1期発掘調査では、建物の周りに瓦が大量に捨てられていることや、再建された金堂に伴う石敷きを発見しましたが、建物の詳細な構造などが不明でした。

2 令和2年度の発掘調査成果

- 大量の瓦を発見しました

金堂の屋根に葺かれたと考えられる大量の瓦を発見しました。瓦は能美市の湯屋町で焼かれたことがわかっており、建物の周りを取り囲むように見つかっています。

- 金堂の地盤改良の跡を発見しました

調査区南西隅で人の頭ほどの大きさの石を並べた石敷きを発見しました。この石敷きは令和元年度の調査でも見つかったものですが、今年度の調査で、この石が建物を建てる前に地面を掘り込み土や石を入れる地盤改良(掘込地業)の一部であることが明らかになりました。

多量の石を丁寧に敷き並べた掘込地業は類例の少ないもので、寺院を建立する際に高度な技術が使用されていたことがうかがわれます。



発見された石敷き



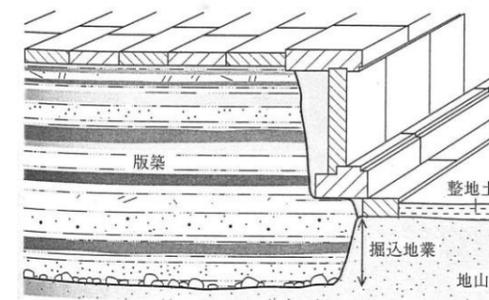
掘込地業の痕跡(南から)



大量の瓦を発見した様子(北西から)



発見された瓦



掘込地業模式図
(発掘調査のてびき各種遺跡編より引用)
掘込地業とは、地面を掘り込み、土や石を突き固めながら埋め戻す地盤改良です。荷重のかかる瓦葺の建物などを建てる際に用いられました。

【末松廃寺跡史跡公園の見どころ紹介】

末松廃寺跡史跡公園は昭和 46（1971）年 5 月 30 日に完成し、来年で整備から 50 年となります。発掘調査の成果のほかに、以下のような見どころがあります。

1. 塔心礎

現在塔の中心に据えられている巨大な石は、塔の中心の柱（心柱）の基礎におかれた石（塔心礎）です。長辺 2.2m、短辺 1.6m の巨大な石で、手取川の転石が運ばれてきたと考えられています。明治 21 年に近隣の^{おおえはちまんじんじや}大兄八幡神社に運ばれ手水鉢として使われていましたが、公園整備を機に現在の場所に戻されました。

塔心礎は劣化が進んでいたため、平成 26 年度には樹脂を染み込ませ補強を行いました。

2. 公園内の豊かな自然

現在公園内の樹木は公園整備時に植えられたものです。わかっているだけで 42 種 400 本以上が植えられており、サクラやイチョウ、アカマツなどが目立ちますが、平成 30 年に公園内の樹木の調査を行った結果、珍しいものが存在することが分かりました。

- ボダイジュ（菩提樹）

ボダイジュは中国原産の高木で、釈迦が菩提樹の下で悟りを開いたと伝えられるなど仏教とかかわりの深い木です。

- ハゼノキ

ハゼノキは関東以南などの温かい地域を中心に分布する樹木で、末松廃寺跡に植えられているものは石川県内で有数の大きさです。実から^{ろう}蠟を採取し、ろうそくを作るなど古くから活用されてきました。

- ムクロジ

ムクロジは日本列島に広く分布する木ですが、末松廃寺跡のものは県内で生えているものの中で特に大きく育っています。実のうち皮は石鹸として使われ、種は羽根突きの羽の先端として使われました。



公園完成直後の様子（南東から）



現在の様子（平成 30 年度、南西から）

